将来につながる出会い

東北大学病院　初期研修医（１年目）　佐藤直実

まず、この海外研修を企画・実現させてくれた多くの方々、Singapore General Hospital の皆様、一緒に研修に行った研修医・指導医の方々に感謝したいです。

研修に行く前、私が一番意識していたのは、ただの観光旅行では終わらせまいということでした。以前にも 2 度、このような研修旅行の経験があります。1 度目は高校 1 年の時で、行先はオーストラリア。この時は 3 週間ほどオーストラリアにホームステイして現地の高校に通うといったプログラムだったのですが、今より性格もおとなしかったこともあり（今は図々しくなったとも言えます…。結婚しておばさんになったのでしょうか)、あまり積極的にホストファミリーや高校の生徒たちと関わることができませんでした。一緒に行った仲間といるのが楽しく、それはそれでいい思い出だったのですが、英語で会話する、現地の文化を学ぶといった点について消極的であったことがずっと心残りでした。2 度目は大学 6 年生の時。この時はスタンフォード大学で 1 週間、3 か所の研究室に顔を出してさまざまな実験の見学などをさせてもらいました。この時から、研修をただの観光にはするまいという意識があり、自分の意思で積極的に学ぶことで、かなり有意義な研修ができたと思っています。こういった経験があったので、多少英語に難があっても聞きたいことは積極的に聞いていこう、色んな人と色々な話をしようと決意して研修に臨みました。その甲斐あって、非常に意義のある出会いをたくさん経験できたと思っています。

まず私にとって大きな出会いは、病理の先生方との出会いでした。私に SGH の病理を案内してくれ、たくさんのことを教えてくれた Dr. Lai と出会えたことはもちろん、若く美しい女性教授の Dr. Tan と出会えたことも大きかったです。Dr. Tan は結婚しており、今度ご主人と北海道にドライブ旅行に行くのだと話してくれました。このような、結婚して家庭を持つ女性が教授として働いているということは、私にとってとても素晴らしいロールモデルでした。今東北大の病理にも 5 人のお子さんを持ちながら働いている女性医師がいらっしゃいます。私が病理医を目指すようになったきっかけの 1 つにはその先生の存在がありますが、Dr. Tan も憧れの存在の 1 人となりました。また、そこで日医の原田先生という日本の Dr とも知り合うことができました。彼からは、私には分からない、病理医としての SGH の面白さを学ぶことができました。まず、シンガポール人は英語と中国語を自由に使いこなすことができるため、ほとんど全世界の人と自由に会話することができます。そのため、病理レポートを少し垣間見ただけでも、積極的に oversea

consult を行っているのが分かるそうです。これは病理診断をするうえで非常に重要なことだと思いました。というのは、例えば Dr. Lai が専門としているような心臓病理の場合、心筋生検ということについてはそれほどメジャーではないながらも日本でも行っていますが、心移植後のフォロー生検ということになると、とても難しい症例となります。しかしこのような症例は心移植が盛んな諸外国では症例数も多く、専門家も多いと考えられ、consult することで有用な意見を得ることができます。Lymphoma など、地域性の強い疾患についても同様のことが考えられます。この時、consult の敷居が低いということはとても有利なことだと思いました。また、病理医の視点から見て、SGH で行っている研究はとてもレベルが高く、また予算もかなりかかっているということでした。

このようにたくさんのよい出会いがあったのですが、それに加えて、日本で活躍する先生方とシンガポールの先生方がよき友人関係であるということを知ることができ、それが勇気になりました。Dr. Lai は東北大ご出身で現秋田大法医学教授（法病理学ご専門）の美作先生とはよき友人であると話されており、Dr. Tan は以前東北大にいらした現川崎医大教授の森谷先生と非常に仲が良く、森谷先生を訪ねて仙台に遊びに来たことがあるともおっしゃっていました。森谷先生は私が病理に興味を持つきっかけとなった基礎医学修練の際の担当教官でもあり、とても感銘を受けました。さらに、今回はお会いできなかったのですが、SGH の Dr. Tan Soo Yang という先生は私が学生時代最もお世話になった血液病理学の一迫教授とお知り合いだということで、今回 SGH は私が特に選んだ研修先というわけではなく、たまたま福島県立医大の先生方がセッティングしてくださったのですが、それでもこのように、知り合いの知り合い、とでもいうような人と人とのつながりを実感することができ、とても感動的でした。帰国してから、Dr. Lai にメールを送りました。このように、私も今回の出会いを大切にし、将来の糧としたいです。

【Dr. Lai と】

また、Internal Medicine の Dr. Colin との出会いも印象的でした。Dr. Colin とはたった 1 日一緒に過ごしただけですが、患者への深い愛情を感じることができました。もともと膠原病専門だった彼女が Internal Medicine へ進んだのは、1 つの臓器の Specialist であるだけでは患者さんを診ていることにはならないと感じたからだそうです。膠原病の患者さんは多くは全身性に炎症をきたし、感染を併発することもあり、腎不全、皮膚病変などさまざまな問題を抱えます。そこから全身管理に興味を持ち、さらに、特に高齢者では、1 人の患者さんが糖尿病、高血圧、心不全、腎不全などといった多くの問題を抱えていることが多いことから、1 つの臓器だけでなく、患者さんを診たいという思いから Internal Medicine の専門家になることを目指したそうです。また Dr. Colin は英語だけでなく、3 種類もの中国語、マレー語を自在に話します。これも、その言語しか話せない患者さんの話を聞くためには当然のことだとおっしゃっていました。それを聞き、英語すらまともに話すことの出来ない自分が恥ずかしく思いました。東北大学病院は東北大にあることもあり、留学生が受診することもあります。多くはアジア圏の方で、日本語は自由でなく、時には英語すら通じにくいこともあります。こういった現実ありながら、言語を 1 つしか使えないことはふがいないことだと感じました。また女性の働き方についても色々と話して下さいました。患者を診ることが楽しく、仕事が一番大切だったため結婚が遅くなったこと、しかし 30 代で今のご主人と出会い、自分の夜勤などについても理解のあるご主人と結婚して幸せであること、ただもし子供がいたら働き方も変わっていたであろうことなどを話してくれました。私は今結婚していますが、夫とは仕事の関係で離れて暮らしています。しかしいずれ同居し、早いうちに子供もほしいと考えています。そうなったときの働き方などについて、色々と考えさせられました。Internal Medicine の病棟で、実習した日、1 人の患者が退院していきました。その時、Dr. Colin に向かって、「私のことを忘れないでね、先生のことを一生忘れない」と言っていました。また、そこで出会った SLE の患者さんは、「どこに行っても診断のつかなかった私の病気を Dr. Colin が診断をつけてくれて、ステロイドですぐによくなったの。それからは普通の生活ができて、好きなボーリングもできた」と話してくれました。Dr. Colin の深い愛情は患者さんに伝わっていて、病気を治すだけでなく、彼女が目指すように患者さんを治療しているのだと感じました。

このようにシンガポールでたくさんの素晴らしい出会いを経験しましたが、その他にも、ともに研修に行った初期研修医・後期研修医の先生方と交流を深めることができました。特に最終日の夜、クラーク・キーに飲みに行き、色々な話ができたことはとても楽しかったです。

【クラーク・キーの夜】

最後に、シンガポールとの出会いについて少し。初めてシンガポールを訪れたのは、上記の高校 1 年生のオーストラリアへのホームステイの時、3 週間のステイを終えて、乗り継ぎ先のシンガポールで 3 日間ほど滞在したのが最初でした。この時は、シンガポールが汚かったのか、私が未熟でアジアを楽しむ余裕がなかったからか、とても居づらい場所だと思いました。屋台はどこも臭いと感じたし、売っているものもなじみが浅く、街も何だか雑多で怖かったです。ただ、もう 9 年も前ということもあり、そういった先入観はなく今回の研修にのぞんだのですが、シンガポールは思っていたよりはるかに暮らしやすく、素敵な国だと思いました。屋台での食事も楽しく、雑多な街も、さまざまな人種の文化が見てとれて興味深く感じました。このような文化の融合から新しいシンガポール文化が生まれ、そして英語と中国語を公用語として世界中とつながっていることに羨ましさを感じました。9 年という年月は人も国も変えてしまうのかもしれません。当時消極的で後悔していた私は、今回の旅行では、研修中だけでなく観光の際もたくさんの人に声をかけたりかけられたりして会話を楽しみました。

今後の課題として、2 つクリアすべき問題がはっきりしました。まずは英語力の問題。1 対 1 だとある程度きちんとした会話は成立するのですが、大勢に入ってしまうとほとんど口をはさむことができず、英語力のなさを改めて感じました。もう 1 つは、これははっきり「問題」というようなことではないのですが、病理を進路にさだめつつ、スーパーローテートで General な医療を学んでいくことのバランス感覚について。今救急を研修中ですが、救急もある意味 General な医療であり、今しっかり学ばなくてはいけないと改めて感じました。

さまざまなことを教えてくれ、大切な出会いをくれたこの研修に参加できて、本当に自分は幸運だと思うとともに、この機会を与えてくれたすべての皆様に改めて感謝いたします。どうもありがとうございました。